

倫理

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和4年度（第2回）大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の倫理の問題作成の方針は以下のとおりである。

人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的諸課題について、倫理的な見方や考えを働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

ここでは、本年度の問題について、14ページに記載の8つの視点から分析し、上記の方針に基づいたものとなっているかどうかについて評価したい。

2 内 容・範 囲

第1問 「真理」について（源流思想）

高校生の会話という場面から、議論における「真理」に関連して、先哲の様々な思想を問う問題設定である。自分の見方や考え方、議論そのものとの考え方を、先哲の原典を読み取り、日常生活につなげて考察する学習過程が重視されている。やや平易な問題もあるが、全体としては、バランスの取れた標準的な難易度の大きな問題である。

問1 ソクラテス、イスラーム、スコラ哲学、ブッダの基本的な考え方について問われている。②のイスラームにおける預言者ムハンマドとその言行・慣行の扱いに関しては、基本的知識から解答できる。

問2 「礼」について、古代中国の先哲がどのように理解したかが問われている。孔子、孟子、墨子のそれぞれの説明について判断が求められたため、やや難易度の高い設問である。

問3 イスラームの共同体や信仰の在り方について理解を問う設問であった。

問4 人間の生き方をめぐる宗教や思想家の考え方について、先哲の言葉や思想の正確な理解が求められ、やや難易度が高い設問である。用語の違いによる判別より、源流思想の分野ではあるが、③のように宗教と近現代の思想との関連の理解を問う選択肢が増えるとよい。

問5 先哲の文章から読み取れる内容と知識を組み合わせる設問であり、ストア派の正確な理解が求められている標準的な難易度の問題である。

問6 資料の読み取りと源流思想の説明について、会話中の発言の正誤を判断する設問。原典の一部を2つ引用しており、内容を吟味させているが、旧約聖書の説明については知識だけで誤りがわかる。資料の活用について、もう一工夫を期待したい。

問7 原典の一部を資料として読み取れる内容と知識を組み合わせる設問である。読解した内容と仏教の理解を確かめる選択肢となつてはいるが、平易である。

問8 会話中の空所に入る文を判断する設問。選択肢の著作になじみのない生徒もいたと思われるが、大問全体をまとめる会話にメッセージ性がある。前後の文脈から正答を導くのは容易であり、知識を問うか、生徒が先哲の思想を活用して発言するような工夫があるとよい。

第2問 「理想」について（日本思想）

生徒どうしや先生との会話を通して理想とはどのようなものかを考えさせる大問である。仏教者の修行している図から判断させたり、先哲の思想を身近な事例を通して考えさせたりするなど、授業改善や生徒の学習改善につながる意欲的な取り組みが見られた。古代から現代までバランスよく出題されており、大問全体としては標準的な難易度である。

問1 古代日本人の宗教観・倫理観についての理解を問う標準的な難易度の設問である。

問2 憲法十七条についての知識を問う標準的な難易度の設問である。

問3 三枚の図と会話文をもとに仏教者の修行の方法を読み取らせる意欲的な問題であるが、華嚴宗については教科書にほとんど記述がないうえ、人物からしか正答を導けないため受験者にとっては難しい設問である。

問4 本居宣長の真心について、自己との関わりにおいて思考し解答させようとするもので、思想は生きているものであるということを伝えると共に、生徒の学習改善につながる良問である。今後もこのような形式の設問を期待したい。

問5 安藤昌益についての理解を問う標準的な難易度の設問である。

問6 安部磯雄や北村透谷は、それぞれ教科書での記載も少なく、その事績や思想内容に踏み込んで学ぶ機会が受験者には乏しいため、やや難易度の高い設問である。

問7 ノートの形式にすることにより西田幾多郎と親鸞という時代の異なる人物を取り上げてそれぞれの思想の理解を問う意欲的な設問であるが、概念についての正確な理解が問われており、判断に迷った受験者が多かったのではないかと推察される。

問8 丁寧に読めば正答を導ける平易な設問なので、倫理的概念の理解を組合せるなど、もう一工夫を期待したい。

第3問 考えることについて（西洋近現代思想）

「考えること」についての会話や資料を元に、西洋近現代思想に関する知識だけでなく、思考力を問う問題が含まれている。会話文三つ、資料二つ、メモ一つがあり、多くの資料を読むのに時間がかかる受験生もいたと考えられる。ここに登場する「魔女狩り」の光景を描いた絵画は、設問の内容に直接関わりはないが、倫理的な見方や考え方についてのメッセージ性を持つ。その後続く会話文やレポートも、他者との対話によって思考を深めていくことを示し、科目として何が重視されているのかが伝わるような大問となっている。難易度の高い問題も含まれるが、全体的には標準的な難易度の設問である。

問1 ルネサンス期に活動したピコ・デラ・ミランドラの思想の理解を問う平易な問題。

問2 「魔女狩り」の絵画とそれに関する会話文を題材に、論理的な思考力を問う標準的な難易度の問題。読解を通して、いつの時代であっても思考停止が少数者への迫害につながるということについて考えさせられる。

問3 デカルトの方法的懐疑についての基本的な理解を問う標準的な難易度の問題。

問4 会話文にある『人間悟性論』や「白紙」から経験論の中でもヒュームではなくロックであると判断し、選択肢からロックの思想について適切なものを選ぶ。経験論についての知識と、ロックの思想についての基本的な理解を問う標準的な難易度の問題。

問5 ヘーゲルの弁証法についての理解を問う。やや平易な問題ではあるが、ヘーゲルの思想についての正確な理解が求められる。

問6 「限界状況」をめぐるヤスパースの思想の理解を問う難易度の高い問題。正答の記述は「限界状況」についての基本的な説明であるが、そのほかのすべての選択肢の記述の中に、ヤスパースの思想を示すキーワードが含まれているため、誤答を判断するのが難しい。

問7 デューイの思想についての理解だけでなく、資料の読解力が問われる、知識と読解を組み合わせた問題。

問8 レポートを題材に、今まで読んだ二つの会話文を踏まえて読解力を問うやや難易度の高い問題。レポートを読むことによって、ⅡとⅢの会話文のつながりを整理し、高校生Fの思考の過程を確認することができる。参考にする文章の分量が多く、正答を導くのに時間がかかる。

第4問 未来世代に対する責任（現代の諸課題と青年期）

「未来世代に対する責任」に関する高校生の会話や資料をもとに、環境や情報社会の課題、現代のヒューマニズムなどについて、用語の暗記だけでは正答できない思想内容の正確な理解を求めたり身近な事例から考察・分析させたりする設問など、思考力・判断力・表現力等を試す良問が目立つ。資料等の分量が多く時間配分が難しい感もあるが、知識理解や読解したことを活用して的確な判断を迫る設問が多いことは、学校現場に対して科目「倫理」を思想史としてのみ取り扱うのではなく、現実社会の価値判断を先哲の思想を手掛かりに考えさせたいという出題者のメッセージが読み取れる。

問1 環境倫理から、国連人間環境会議や宇宙船地球号など教科書に掲載された用語であるが、知識を問うaで誤った解答が多く正答率が低い。現代の諸課題の単元で細かな知識を求めすぎると本来期待される探究的な側面から離れて説明的な授業に陥る懸念がある。

問2 具体的な日常場面からデジタル・デバイドの事例を判断させる設問。身近なことに置き換えて判断させる問題が増えていくことが、自分の事として考えさせるきっかけになる。

問3 青年期や家族に関する設問で、基本的知識があれば消去法で正答が選択できる。子どもが発達がテーマであり、現代的課題が取り上げられると授業でも扱う材料になりうる。

問4 メルロ＝ポンティとレオポルドは、高校の授業でも十分触れられず戸惑った受験生も多かっただろう。しかし、先哲の思想を幅広く学び思考する手掛かりにしていくことは重要である。

問5 ガンディーの非暴力不服従の概念を正しく捉える必要がある。単に用語を覚えるだけでなく理解の質を問う問いが増えていけば、「倫理」の学び方や意識が変わるであろう。

問6 資料にある2つの価値を読み取り、その具体例を組合せる設問で、「倫理」の知識が求められるわけではないが、論理的な思考力を問うことは、この科目の重要な側面であり、日ごろより思考の訓練を促す点で、学習者によりメッセージを与えている。

問7 将来に対する意識調査の国際比較を資料から読み取る設問。丁寧に判別すれば正答できる。

問8 コールバーグの道徳性発達は初見の受験者も多いだろう。問6同様、倫理の知識を前提にしないが、倫理的な題材資料を読み取り、論理的に考えれば正答は難くない。

問9 小説の一説を読み、また冒頭の会話文の文脈も踏まえて、会話文の高校生の考察を組合せる問題。会話文の意図を汲み取り、提示された小説も読解する必要があり、従前のリード文の趣旨を問うのみの設問よりも、より高い考察力が要求される良問である。

3 分量・程度

試験問題の分量は、大問4、総設問数33で昨年と同様の構成である。各大問及び各設問で原典資料等を読解・活用して思考のプロセスを問うたり、文脈にあわせて論理的に正しい判断を迫ったりするパターンが数多くみられた。昨年の共通テストを参考に、的確に判断・解答する準備をしていれば、時間内の解答は難くない問題数であり、全体としておおむね適切な分量と言える。

前年に比べれば難化といえるが、全体の難易度は標準であろう。いずれの大問も出題内容・分野がバランスよく取り上げられ、思考停止や未来世代への責任などの現代的課題が示されたところに、試験問題を通して若い世代に考えさせようとする出題者の意図が読み取れる。教科書の基本事項を問う設問においては、組合せの選択肢を多く設定するなどして適切な難易度となるよう工夫されたい。統計資料の読み取りの設問においては、解答に当たってページをめくる作業が求められたが、可能であれば見開きで閲覧ができるよう改善されたい。また、教科書等で頻出度の低い先哲の思想は、考察することで解答させ、教科書に頻出している思想家についてはより正確な内容理解を求めることで、適切な難易度となるよう配慮されたい。単なる知識だけでは正答を導けない設問を多くすることで、高校の授業改善に一層拍車をかけるきっかけとなることを期待する。

4 表現・形式

各設問の文章表現・用語について特段の問題はなかった。昨年につづき図画を素材とした設定があり、視覚的な資料から考察を迫る設問は授業の導入などに活用できそうで意義深い。設問の中には倫理の知識を必要とせず、受験者がその場で考察・分析をして正答を導く問いも散見されるが、現代社会が直面する課題や倫理的判断をテーマにした設問は、倫理を単なる歴史的事項で終わらせず、特に思想内容を具体的な生活問題などに転用して考えさせる問いが倫理を学ぶ意義に照らして大変有効である。先哲の思想やそのキーワードの暗記だけで判別できないような問い方を一層充実させることが授業改善に一翼を担うはずである。また読解力のみで、あるいは資料の読み取りのみで正答できるのではなく、知識を前提としながら論理的思考力を問うなどの形式を工夫すれば、倫理の学びのおもしろさを伝え、説明的な授業からの脱却を促すメッセージとしての役割を果たすことができる。

5 まとめ（総括的な評価）

本年度の共通テストの公民科受験者数は174,111人（昨年度は177,852人）であった。そのうち「倫理」の受験者は21,713人（昨年度20,043人）であり、昨年度に比べて1,670人増加した。公民科における「倫理」の選択率は12.5%で、センター試験の平成31年度10.7%、令和2年度の11.0%、昨年度の共通テストの11.3%と、上昇傾向にある。

共通テストの2年目となった本年度の問題は、全体として、各大問で学習過程を意識した場面設定がなされていた。知識のみ、資料の読み取りのみのどちらかに偏るのではなく、引き続き、倫理の知識を踏まえた上で深く考察するような設問を期待したい。